

「聖人伝」(2)

木版挿絵入り西洋初期印刷本零葉コレクション III

File No.22004-13169a/b ~ 13189a/b

No.22004-13198a/b

No.22004-07687a/b ~ 07690a/b

吉田 正彦*

本稿では前号に続き、明治大学図書館蔵「木版挿絵入り西洋初期印刷本零葉コレクション」から Jacobus de Voragine (1230?-1298): *Legenda aurea* 及びその類書、例えば *Leben der Heiligen*¹ など、いわゆるカトリックの聖人にまつわる伝説書の零葉について報告する。前稿ではこのコレクションに収められる刊本を8点、95葉としたが、*Ludolphus de Saxonia: Vita Christi*/ルドルフス・デ・サクソニア『キリストの生涯』42葉など、複数の刊本の零葉が紛れ込んでいることが判明したので、それらを除外した。その一方でコレクションのリスト²を改めて点検し、内容および挿絵から明らかに『黄金伝説』あるいはその類書に由来すると思われる4葉を加えた。そのうち3葉はドイツ北部からオランダの日常語である低地ドイツ語によるものであり、挿絵のみを切り抜いた最後の1葉がシュトラースブルクを含む高地ドイツ語版なので、両者を別の地域の刊本と判断した。その結果、現時点で判明している「聖人伝」の零葉は、ラテン語版1、低地ドイツ語版

* よしだ・まさひこ／前明治大学文学部教授／ドイツ文学、ドイツ文化史

を含むドイツ語版7、合せて8点の刊行本からの40葉である。

- 1 Leben der Heiligen「聖人たちの生涯」のタイトルで刊行された聖人伝には、G. ツアイナー（アウクスブルク /1472 年）、A. コーベルガー（ニュルンベルク /1488 年）、J. シェーンスペルガー（アウクスブルク /1496 年）などがある。
- 2 本誌第11号所載の鈴木秀子氏論文、特に198-203頁「所蔵リスト」を参照されたい。そのうち、51が当該の4葉である。因みに本コレクションの購入時に添付されたリストの記述は以下の通り。

Heiligenleben. Strassburg, Grüninger, [?date]

8 leaves with woodcuts, plus one coloured cutting （8は3の誤記述）

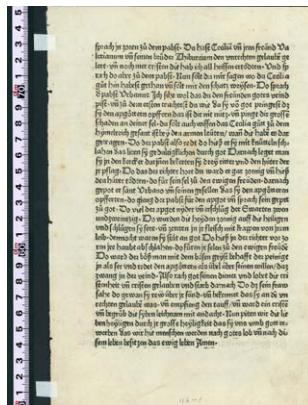
ドイツ語版3

(22004-13169-a/b ~ 13187-a/b)

IV. 『Legenda aurea // 黄金伝説』

ヨーハン・ベムラー（アウクスブルク）1480年

15-① (13169)-b 教皇聖ウルバヌス（5月25日）



(13169)-b

教皇ウルバヌス一世 pabst Vrbanus（在位 222-230）として、アレクサ

ンデル・セウエルス皇帝治下のローマで殉教したとされるが、拷問を受けた同名の司教と混同された可能性もある。本零葉は、ウルバヌスがローマの都長官に捕えられて、尋問を受ける場面から。長官は「お前はカエキリア Ceciliâ とその許婚者ウアレリアヌス freünd Valerianus、そしてその弟ティブルティウス brüder Thiburcius に許されざる神を信じさせた。余はもっと多くのキリスト教徒をすべて殺すよう命じた」とウルバヌスを断罪した上、既に自分が命じて斬首させたカエキリアの財宝の隠し場所を白状せよ、と迫る。「カエキリアの宝は天の国に送られて、貧しい人々のもとにある」と答えると、長官は怒ってウルバヌスを棍棒で打たせ、投獄する。だが獄中で彼は三人の騎士や獄卒を回心させ、ローマの神殿では神々に生贄を捧げることを拒み、キリスト教の神に祈ると神々の像が次々に倒れて祭司たち 22 人を押し潰す。ウルバヌスと騎士たちへの苛烈な拷問は続き、最後は斬首により殉教する。なお『黄金伝説』の「聖女カエキリア」参照のこと。

参考：伝説 72 章 /LCI VIII 513ff./LNH 811f.//vgl.: 伝説 163 章 //

15- ② (13169)-a ローマの聖女ペトロネラ (5 月 31 日)



(13169)-a

冒頭に表題 Von sant Petronella 「聖女ペトロネラ伝」。続いて装飾大文字 S[Ant Marcellus schreybet daz Petronella...] 「聖マルケルスが書き記

しているのだが、使徒聖ペテロ *sant Peter* の娘ペトロネラはとても美しく、また神を愛して熱心に仕え、永いこと病の床にあった…。ペテロの弟子ティトゥス *Thitus* が「あなたは多くの病気をお治しになりましたが、何故お嬢さんは病気のままにしておかれるのですか」と問うと、ペテロは、ある者は病に苦しみ、またある者は悩みに苦しむ。だが永遠の命を得るにはそれが必要なのだ、と答えたという。ある時、代官のエラクトゥス *graff Elactus* がペトロネラに求婚し、厳しい条件を課せられる。エラクトゥスはそれを満たして再度求婚に訪れるが…。本零葉はここで終る。

挿絵は、ペトロネラが父の指示に従って病床から起き、父に食事の用意をする場面。

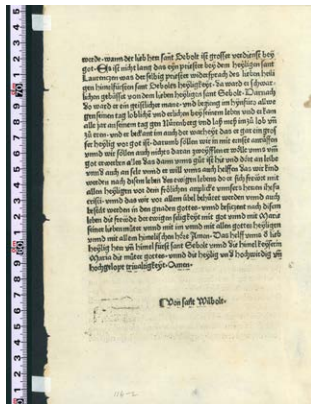
参考：伝説 73 章 /LCN VIII 157/LNH 653/Schedel C VII裏 //

16- ① (13170)-b ニュルンベルクの隠者 聖ゼバルト (8月19日)

聖ゼバルト *sant Sebolt* は、特に南ドイツの町ニュルンベルク *Nürnberg* 周辺で崇拝される。14 世紀頃の伝承によれば、聖ウィリバルトおよび聖ウニバルト兄弟 (16- ②参照) の随伴者として 8 世紀頃ニュルンベルクに来て隠者として定住し、宣教活動を行ったという。ヘレスフェルトのラムペルトゥスが伝えるところでは、ニュルンベルクの城の南にある丘の彼の墓で、1070 年および 72 年に不思議な出来事があり、多くの巡礼者がここを訪れたといわれ、14 世紀にここにゼバルト教会が建てられたという。

参考：LCI VIII 316ff./LNH 735/Schedel CL XII裏 //

16- ② (13170)-b/a アイヒシュテットの聖ウィリバルト (7月7日)



(13170)-b



(13170)-a

b 面末尾に表題 Von sant Wilbolt 「聖ウィリバルト伝」。a 面冒頭に裝飾大文字 D[er heylig herre sant Wilbolt ist von edlem geschlechte geboren wañ sein mûter was ein edele künigin von engellât …] 「聖ウィリバルトは高貴な一族に生れ、母はイングランドの高貴な王女であり…」、父はアングロサクソンの聖リカルドウス sant Reichard (?-720)、700年のことであった。20歳のとき、父および弟ウニバルトとローマを訪れた後、723年には聖地巡礼、729年からはモンテ・カシーノのベネディクト修道院orden sant Benedictiに入る。740年に宣教のため南ドイツに送られ、アイヒシュテットの初代司教として司教座聖堂を建立。787年没。また弟とともにハイデンハイムに修道院を創建し、弟が修道院長に。「ドイツ人の使徒」と呼ばれた聖ボニファティウス(673?-754)は伯父だという。挿絵はアイヒシュテットの司教座聖堂の建設を指揮するウィリバルト。

参 考 : LCI VIII 615f./LNH 857/LThK X 918f.//vgl.:(Reichart) LCI VIII 266f./LNH 709// (Wunibald) LCI VIII 632/LNH 866/LThK X 1266//

17- ① (13171)-b マインツの聖アルバヌス (6月21日) ⇒ 3- ① /36- ① /

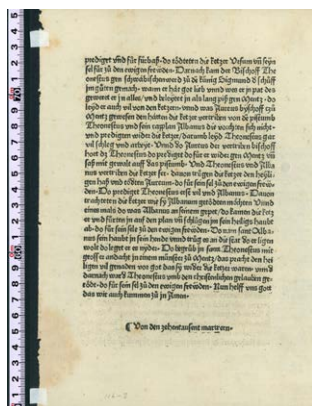
西暦 400 年頃に聖職者として地中海の小島からイタリア、ガリアを経てドイツのマインツに至り、ここで宣教。406 年にヴァンダル人（あるいはフン族）が侵攻し、この町に火を放った時に殉教したとされる。

本零葉ではアルバヌスのこうした事績が、同時代の他の聖人との関連のもとに語られる。フィリピの町の司教テオネストゥス byschoff Theonestus はマケドニアの国を追われ、聖職にあるウルススおよびアルバヌスを伴って説教をしながら旅を続ける。途中で「異端者ども die ketzer がウルスス Vrsus を殺したので、その魂は永遠の喜びへと旅立った」。一行はシュワーベンのジグムント王 künig Sigmund の庇護を受けて、マインツに着く。ここでは司教アウレウス Aureus byschoff が異端者たちに町を追われていたが、テオネストゥスとアルバヌスは恐れずに説教をする。これを知ってアウレウスもマインツに戻って司教区を取り戻し、テオネストゥス等は異端者を追い出したのだが、アウレウスは彼らに殺害される。それにも拘らずテオネストゥスたちは布教を続ける。だが、アルバヌスが祈っている時に異端者どもが彼を野原に引き立て、斬首した。するとアルバヌスはその首を持ち、埋葬されたところまで走り、そこに倒れた。そこでテオネストゥスは「大いなる敬虔さを以って mit grosser andacht」亡骸をマインツの聖堂に葬った。その後、テオネストゥスもキリストの信仰ゆえに殺された。

参考：LCI V 68ff./LNH 119//vgl.:(Vrsus) LCI VIII 527/(Theonestus) LCI VIII 459f./LNH 785/(Aureus/Auräus) LCI V 293/LNH 152f//

17- ② (13171)-b/a 聖アカツィウスとアルメニアの一万人の殉教者

(6月22日) ⇒ 3- ② /35- ③ /36- ② /



(13171)-b



(13171)-a

b 面末尾に表題 Von den zehentaufent martnern 「一万殉教者伝」。a 面冒頭に装飾大文字 D[O Adrianus vnd Anthonius …] 「ハドリアヌス帝とアントニウス帝が」 帝国を治めていた時代 (117-161)、将軍アカティウス Achacius は皇帝の命に従って、九千の兵を率いて小アジアに遠征する。優勢な敵軍を前に敗戦やむなしと思われた時に天使が現れ、異教信仰を捨ててキリストに祈りを捧げるならば、汝は勝利するであろう、と告げる。戦が勝利に終り、アカティウスは兵とともに天使たちに導かれてアララト山に上ると天が開く。一方皇帝たちはオリエントの王七人を招集し、改宗した九千の兵を拷問にかけよう命じる。こうした中で、更に一千の兵も改宗する。あわせて一万もの人々が鞭打たれ、石を投げられ、茨の冠をかむせられ、磔刑にされて殉教した。本零葉はアカティウスの他にプリミケリウス Primicerius、エリアデス Eliades の二人の将軍、騎士隊長テオドルス Theodorus 等の名も挙げて、伝承でありながら、現実の出来事として人々の信仰を促す。挿絵はアララト山から茨の茂みに突き落とされて殉教する兵たち。なお 3- ②を参照のこと。

参考：LCIV 16ff./LNH 109//

18- ① (13172)-a/b パレストリーナの聖アガピトゥス (8月18日)



(13172)-a



(13172)-b

冒頭に装飾大文字 A[gapitus waz eyn reiches edeles kint …]「アガピトゥスは裕福で高貴な家の子供で」、徳を備えたキリスト教徒だった。アウレリアヌス帝（在位 270-275）治下のローマ帝国、首都近郊の町パレストリーナ。「この頃人々はキリスト教徒を捕えて殺害した」。アガピトゥスは裁判官アンティオクス richter Anthiochus により拷問を受け、棄教を迫られるが、Ich will got vnserm lieben herren ihesu cristo dienen…「私は神である我らが主、イエス・キリストに仕えます、それは誰によっても止めることはありません」と答え、斬首により殉教する。シェーデル『世界年代記』によれば 15 歳だったという。挿絵は二人の刑吏から鞭打ちの拷問を受けるアガピトゥス。参考：LCI V 43/LNH 116//vgl.:Schedel CX VIII 表 //

18- ② (13172)-b クレルウォーのベルナル (8月20日)

挿絵上に表題 Hienach saget es von des heyligen herren sant Bernharts leben 「ここから聖ベルナルの生涯が語られる」。挿絵右に装飾大文字 S[Ant Bernharts vatter der hieß Tetelinus…]「聖ベルナル（ドイツ語式にベルンハルトと標記）の父はテテリヌスと呼ばれ、良家の生れで徳の高い騎士であり、息子 6 人と娘がひとりあった。母はアーデルハ

イトで…」。ベルナールは 1090 年、フランスのブルゴーニュに貴族の三男として生れ、1112 年に 26 人の貴族と兄弟 4 人とを誘ってシトーに設けられた改革修道会に入り、1115 年には修道士 12 人と共に シャンパーニュ地方のクレルウォーに派遣されて修道院を創建、大修道院長としてシトー修道会の指導者となる。1153 年 8 月 20 日死去。

挿絵は、あるクリスマスの夜。少年ベルナールは幼児イエスの幻を見た。それがイエス誕生の時刻であるを知り、修道院に入ることを決意する場面。

参考：伝説 114 章 /LCI V 371ff./LNH 166f./LThK II 239ff.//

19- ① (13173)-a アッシジの聖女クララ (8 月 12 日)

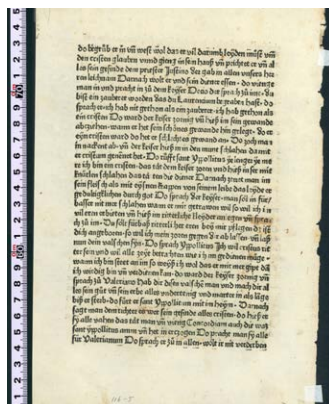
聖女クララ *sant clara* は聖フランチェスコの最初の女弟子。1194 年にアッシジの有力な貴族の家庭に生まれる。18 歳の時フランチェスコ *sant Franciscus* のもとで指導を受け、姉アグネスと共に近郊の聖ダミアノ教会に留まって、クララ女子修道会を創設。1253 年没。本零葉ではクララによる二つの奇跡が語られる。息子を亡くした婦人が涙にくれながら聖女に祈る－息子を生き返らせて下されば、跣足修道会士に致します、と。すると婦人の夢に聖クララが聖フランチェスコとともに現れ、誓願を守るように告げる。目を覚ますと息子が蘇生して言う、二人の聖人がぼくの手をとってこう言ったんだ、「起ちなさい、そしてお母さんを喜ばせてあげなさい」って。息子は後にヒスパニア *hispaniêland* の聖クララ教会の修道僧になる。聖クララはそこでも 20 人を蘇らせた。またクララ没後 2 年、教皇アレクサンデル四世 *Der heilig Alexander der vierd bapst* (在位 1254-61) がクララを讃え、枢機卿、司教、他の聖職者たちを集めて彼女の結婚式を行ったところ、今後は毎年聖ラウレンティウス *sât Laurenczê* の祝日 (8 月 10 日) の 3 日後に行うよう告げられたという。

参考：LCI VII 314ff./LNH 193/LThK VI 314//

19-② (13173)-a/b ローマの聖ヒポリトゥス (8月13日)



(13173)-a



(13173)-b

a 面挿絵右に表題 Von dem lieben heilige sant Yppollito sein lebê 「聖ヒポリトゥス伝」。その下、本文冒頭に装飾大文字 D[er lieb herr Sant yppollitus ist von rittellichem geschlecht...] 「聖ヒポリトゥスは騎士の出で、ローマ皇帝配下にあったが、聖ラウレンティウス sant Laurêcz が彼を回心させ、洗礼を授けた。聖ラウレンティウスが殺されると、その亡骸を埋葬した」。帰宅後、司祭ユスティヌス priester Justinus から聖体 unsers herren leichnam を拝領したところを捕えられ、デキウス帝 keyser Decius (在位 249-251) の前に引き出される。ヒポリトゥスは拷問にかけられるが棄教を拒んだため、帝臣ウアレリアヌス Valerianus に引き渡され、乳母コンコルディア Concordia と共に再び拷問を受けて息絶える。

挿絵は鞭打たれ、鉄櫛で肉をそがれるヒポリトゥス。

参考：伝説 112 章 /LCI VI 539f./LNH 374ff./LThK V 378//

20 (13174)-a/b ローマの聖キュリアクス (8月8日)



(13174)-a



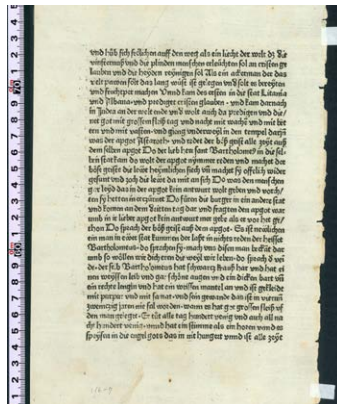
(13174)-b

a 面冒頭に表題 Von sant Ciriaco 「聖キュリアクス伝」。挿絵右に装飾大文字 C[iriacus wz ein cristen …] 「キュリアクスはキリスト教徒で、神を愛し、日夜熱心に神に仕え…」。ディオクレティアヌス帝 Dyoclecianus 治世下、305 年頃のローマーキリスト教弾圧の嵐の中で、多くの信徒が棄教を迫られて殉教する。キュリアクスもそのひとり。皇帝の大浴場建設に駆り出され、また同志のラルグス Largus やスマラグドゥス Schmaragdus と共に投獄される。だが皇女アルテミア Arthemias にとり付いた悪霊を祓って病を癒し、釈放される。アルテミアは彼から洗礼を受け、王妃セレナ Sirena は住居を与える。折も折、皇帝のもとにペルシャ王の使いが来る、王女テビア Thebia の病治療のためキュリアクスを派遣されたしと。ペルシャに赴いたキュリアクスは、アルテミアを苦しめたあの悪霊が今度は王女にとり付いているのを知り、テビアを治療する。キュリアクスはここに 40 日滞在し、テビア、国王夫妻、臣下に洗礼を授けた。本零葉はここで途切れる。だがこの間にローマでは、ディオクレティアヌスは亡くなっており、キュリアクスは皇女に洗礼を授けた罪で捕えられ、拷問の上殉教する。挿絵は沸騰した瀝青を浴びせられ、拷問に耐えるキュリアクス。参考：伝説 110 章 /LCI VI 16ff./LNH 203/LThK III 118f.//

21 (13175)-a/b 使徒 聖バルトロマイ (8月24日)



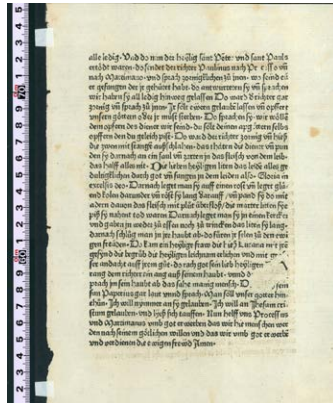
(13175)-a



(13175)-b

a 面冒頭に裝飾大文字 D[er lieb zwölff pot sant bartholomeus der was eyn herzog von geburt …]「十二人の使徒（のひとり）バルトロマイは貴族の出であった。我らの主が彼を選び、声をお掛けになると、彼は身分も領地も捨て、即座に主に従った。我らの主はご受難とご昇天の後弟子たちを世界中に送り出されると、彼のもとに姿を現され、こうおっしゃった、バルトロマイよ、この世界の果てにあるイウデア Judea に行きなさい、と」。『黄金伝説』に記されない、否、聖書にもない彼の出自と、彼のインドでの布教活動がイエスの指示によるものであったことが語られる。バルトロマイはこれに従い、キリストの信仰により、「闇と盲目の人々に光を与えるべく」、また「農夫が永く荒れ果てていた畑を耕して、豊かな実りの準備をする使命を与えられていると同様に」、先ずリタニア Litanja とアルバナ Albana の町でキリストの教えを広めた。その後のインドでの布教については『黄金伝説』に伝えられる、偽神アスタロト abgot Astaroth の神殿での悪霊退治およびアスタロト神の訴えにより人々がバルトロマイ捜しをする場面までが、本零葉に収められる。挿絵は、バルトロマイの殉教。アルメニアのアルバナに戻った後、バルトロマイは捕えられ、皮膚を剥される等の拷問に耐えた後で、斬首されたという。参考：伝説 117 章 /LCI V 320ff./LNH 158/LThk II 9f./

22-① (13176)-b ローマの聖プロセスと聖マルティニアヌス (7月2日)



(13176)-b

Vnd do nun der heylig sant Péter vnd sant Pauls ertödt waren…「そして聖ペテロと聖パウロが殺された後で」、裁判官パウリヌス richter Paulinus は、宣教中に捕えられたこの二人の監視を命じておいた騎士プロセス Processus とマルティニアヌス（零葉ではマルティマヌス Martimanus）を呼び付け、詰問する、あの二人をお前たちは一体どうしたのか、と。投獄された聖人たちにより彼らは回心して洗礼を受け、二人を釈放していたのである。だが皇帝ネロによるキリスト教弾圧の時代、早急にローマを立ち去るようにとの信徒たちの懇願に拘わらずこの国に留まったために、聖人たちは殉教したのである。事情を知ったパウリヌスは怒り、騎士たちに棄教を迫り、棒で叩きのめし、身体肉を削ぐ等、様々の拷問を加える。だがプロセスとマルティニアヌスは栄光の讃歌 Gloria in excelsis deo を歌ってこれに耐える。その後も手心なく拷問が繰り返されて投獄、そして斬首されて「二人の魂は永遠の悦びへと旅立った」。彼らの亡骸はルカナ Lucana と名乗る女性によって埋葬された。

参考：LCI VIII 227/LNH 686/LThK VIII 484f.//vgl.:Schedel C VII表//

22-② (13176)-a アウクスブルクの聖ウルリヒ (7月4日)



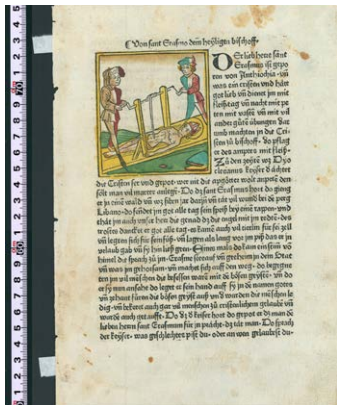
(13176)-a

冒頭に表題 Von dem lieben herrn sant Vlrich 「聖ウルリヒ伝」。続いて挿絵右に装飾大文字 D[Er lieb herre sant Vlrich was...] 「聖ウルリヒはドイツの高貴な身分の家に生まれた。父フバルドゥス Hübaldus はディリングゲン Dillingê とコーブルク kuburg 伯、母ディーブルガ Diepurga はファイミンゲン Faymingen の領主の娘であったが、信仰と敬虔な生活のお蔭で…神が子息ウルリヒを二人に授けた」。890年のことである。10歳の頃、ザンクト・ガレン修道院付属学校に入学、909年には司祭に叙階、923年に司教に。聖職にありながら、一方では国家および国王に忠誠を尽し、特にオットー一世（在位 936-973; ザクセン朝の国王、962年に初代の神聖ローマ皇帝）とは生涯親交があった。当時ハンガリーからの侵攻が度重なり、955年に南ドイツのアウクスブルクが攻撃を受けると、近郊のレヒフェルトの戦いに加わり、国王に勝利をもたらした。962年には世俗の義務から身を引き、聖職者の育成、戦闘で破損した多くの修道院の修理、教会堂の新設などに努め、またアウクスブルクに貧困者用の宿泊施設を設ける等、病人や困窮者の救済にも尽力した。挿絵は司教姿で椅子に座ったまま眠る聖ウルリヒのもとを天使たちが訪れる場面。通常は天使はひとりで、司教杖と、盃または災いや病および鼠除けのシンボルとしての十字架とをウルリヒに差し出すのだが、

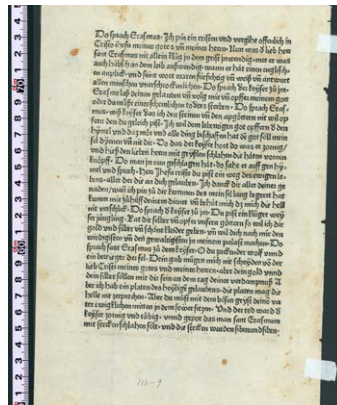
その変形か。

参考：LCI VIII 507ff./LNH 807f./LThK X 454ff./vgl.:Schedel CLXXX 裏//

23 (13177)-a/b フォルミアの聖エラスムス (6月2日)



(13177)-a



(13177)-b

冒頭に表題 Von sant Erasmo dem heyligen bischoff 「司教 聖エラスムス 伝」。挿絵右に装飾大文字 D[Er lieb herre sant Erasmus ist geporen von Anthiochia...] 「聖エラスムスはアンティオキアに生れ、キリスト教徒として神を愛し、祈りと断食、その他の善行を行い、日夜熱心に神に仕えたので、キリスト教徒たちは彼を司教に選んだ」。その頃ディオクレティアヌス帝 Dyoclecianus keyser はローマの神々を崇拜しない者を拷問にかけて苦しめたので、エラスムスは森に入ってから七年を過した。その間、鳥が彼に食事を運んだという。ある時天から「エラスムスよ、起って街に行きなさい」と言う声があつて、彼が森を出ると、悪霊に憑りつかれた大勢の者に会った。彼が神の名のもとに人々の頭上に手をかざすと、悪霊はたちどころに退散し、彼は多くの者をキリスト教に改宗させた。これを聞いた皇帝はエラスムスを捕え、棄教を迫る、ローマの神々に生贄を供えよ、さもないとお前は恥ずべき死に方をするぞ、と。彼がこれを拒むと、皇帝は鞭で打って攻め立て、改めてローマの神々に香を捧げよ、そうすればお前に金、銀、そして美しい服を

とらせよう、と。これに対しエラスムスは、皇帝の贈り物は私をキリストから別れさせることはできないと答えると、皇帝は再度棒で彼を叩かせる。本零葉はここで途切れる。伝承によるとこの拷問の後、マクシミリアン帝の時代になって、エラスムスはイルリア（今日のユーゴスラヴィアの都市ミトロヴァツァ）で宣教活動を行って拷問にかけられ、それから間もなくイタリアのフォルミアで亡くなったという。303年頃のことと言う。十四救護聖人のひとり。

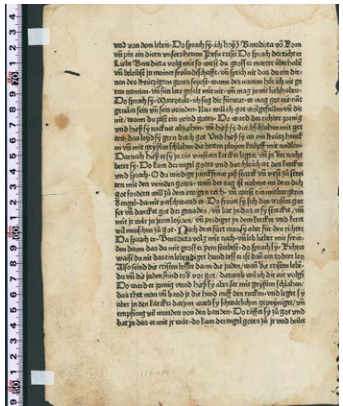
挿絵は司教帽を冠ったエラスムスが、拷問により腸を引き出され、巻き取られる場面。

参考：LCI VI 156ff./LNH 252/LThK III 955//vgl.:Schedel CXX IV裏 //

24 (13178)-a/b オリニイ = シュル = オアーズの聖女ベネディクタ
(10月8日)



(13178)-a



(13178)-b

伝承によると、365年頃の10月8日、北フランスのオリニイ/アンOrigny/Aisne（今日のOrigny-Sainte-Benoîte）で殉教。本零葉は聖女の事績を数頁に渡り詳述する。

本文冒頭に装飾大文字D[Je lieb Junckfraw sant Benedicta wz eines wirdige Römers tochter…]「乙女聖ベネディクタは高貴なローマ市民の娘で、十二人の乙女を身近においていた。いずれも高貴な生れで、清

らかな、神に祝福された生活を送っていた」。その頃、ローマの司教ク
ウィンティヌス Quintinus がフランス franckreich に渡って宣教中にア
ミアンで殉教する。これを聞くとベネディクタは父の遺産を放棄し、
乙女たちとフランスに渡り、ローマ同様の清らかな生活を送りつつ、
異教徒たちに良い教えを伝えた。その後天使に導かれてアウレリオン
Aurelion の町に移り、多くの人をキリスト教に改宗させると、国中か
ら大勢の者が集まり、神の恩寵に浴した。これを裁判官マトロトゥル
ス richter Matrotulus が耳にし、彼女を捕えて素性を問い、「私に従うな
ら、味方になろう。十字架に架けられた神の僕だなどと言ってはならぬ。
奴の教えは気に食わぬ」と言う。これに対し、ベネディクタが「私が
気に入りたいのは神様です、あなたじゃありません。だって、あな
たは神様の敵なのですもの」と答える。マトロトゥルスは怒り、ベネディ
クタを裸にして鞭で打たせる。彼女がこれに耐えると、今度は十字架
に縛り付け、針を植えた鉛玉の付いた鞭で打たせ、投獄した。夜になり、
ベネディクタが祈っていると、天使が現れて牢を照らし、「心を強く持
ち、神の敵と戦いなさい。神があなたを永遠の国に迎える日は近いの
だから。そうなれば、あなたは天使の仲間になる」と言って姿を消した。
ベネディクタは神に感謝し、その後も牢の中から多くの人々を回心さ
せたのだった。マトロトゥルスはその後も改めて自分に従うよう求め
たが、ベネディクタが拒んだので、彼女を後ろ手に縛り、拷問を加え
た。彼女は傷だらけになりながら、私と一緒にいて下さいと神に祈ると、
天使が現れ…。本零葉はここで終る。

挿絵はベネディクタが服を剥され、鞭打たれる場面。

参考：LCI V 365/LNH 161f./LThK II 170//

25- ① (13179)-b 皇帝 聖カルル (カルル大帝)

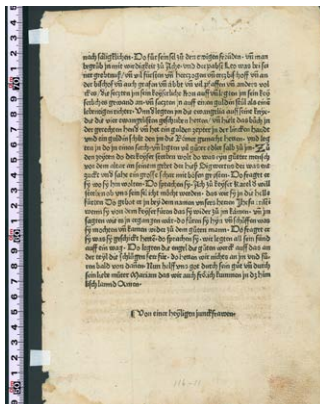
(1月28日および7月27日または30日)

冒頭…Do für sein sel zû den ewigen freuden…「こうして彼の魂は永遠の喜びへと旅立ち、人々は彼をアーヘン Ache に手厚く葬った。そして教皇レオ der pabst Leo や、多くの諸侯や領主、大司教、司教、代官や修道院長、そしてその他の人々も葬儀に参列した。人々は彼に皇帝冠を被せ、皇帝の服をまといせ、あたかも生きる裁き手であるかのように黄金の椅子に坐らせた。そして四福音史家による福音書をその膝に置いて右手を載せ、左の手には黄金の王笏と、ローマ人が造った黄金の盾とを持たせて、彼を棺に納め…」とあるところから、フランク国王カルル一世（在位 768-814）の、また 800 年に教皇レオ三世（在位 795-816）により西ローマ皇帝の冠を授けられてからはカルル大帝 keyser Karel の事績か。本零葉には次の挿話も収められる。シグウェルトウス Sigwertus という名の男が祭壇に祈りを捧げるうちに恍惚状態に陥った。すると悪霊が大きな群をなして来るのが見えたので行き先を問うと、カルル大帝が死の床にあるので、彼の魂を手に入れ、地獄に持って行きたいのだという。そこでシグウェルトウスは彼らの帰りを待ち構えて結果を問うと、大帝の薨去後、生前の行為を計る天秤の一方の皿に自分たちは彼が犯したすべての「罪」all sein sündを載せたが、天使たちが「善行」die gûten werckを載せた他の皿の方が重く、魂を手に入れることができなかったと答えた。

参考：LCI VII 276ff./LNH 478//vgl.:Schedel CLX VII表 //

25- ② (13179)-b/a アンティオケイアの乙女 (4月28日または29日)

⇒ 2- ② /



(13179)-b



(13179)-a

b 面末尾に表題 Von einer heyligen junckfrouen 「聖処女伝」。続いて a 面冒頭に装飾大文字 E[S waz ei heilige jückfrau jn Antiochia die was …]「昔、アンティオケイアに聖なる乙女がおり、自分の姿が男たちの目に触れないよう常に気を付けていた」。キリスト教徒で、昼夜熱心に祈り、断食して神に仕えたとして、聖アンブロシウス sanct Ambrosius の『童貞論』により、乙女の生涯を紹介する。「人々がキリスト教徒を追放し、あるいは捕えて殺害していた頃のこと」、乙女はその信仰ゆえに非難され、途方にくれながらも、真剣に神に祈ったので、神は乙女と共にいて下さり、また死や拷問を恐れる気持ちを静めて下さった。ある時裁判官の前に引き出され、我が神々を信じないのであれば、女郎屋 das gemein hauß に入れると告げられる。乙女は神の恩寵に身を委ね、純潔を失うくらいならばと、神に死を願うのだった。さて女郎屋では乙女の部屋の前に集まった男たちが先を争い、あわや喧嘩が始まろうかという騒ぎである。部屋では乙女が天を見詰めて神に祈りを捧げて…。本零葉はここで途切れる。だが『黄金伝説』は、乙女と我が身を挺して彼女を救いに現れた男との二重の殉教により、物語を閉じる。挿絵は乙女が裁判官から判決を言い渡される場面。

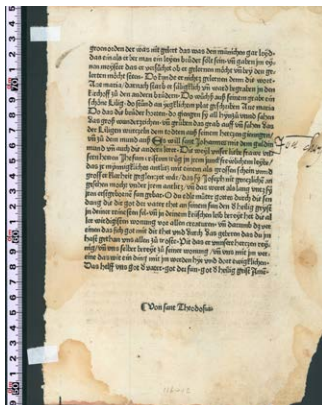
参考：伝説 60 章 //

26-① (13180)-b 主のお告げ (3月25日)

この日、神は乙女マリアのもとに大天使ガブリエルを遣わし、マリアが神の子を産むと告げる。この受胎告知の事績に関連し、本零葉はガブリエルによるマリアへの挨拶「アヴェ・マリア Ave maria」にまつわる奇蹟譚を取める。ある高貴な身分の男が修道院に入る。キリストの教えに関する知識に乏しいものの、助修士 leyen brüder として修道院内の労務作業をさせるわけにもいかず、先生を付けて勉強させた。だが彼が習得することができたのは「アヴェ・マリア」という言葉だけだった。その後彼は亡くなり、他の僧たちと同じ墓地に埋葬された。すると彼の墓から美しい百合が育ち、どの花卉にもアヴェ・マリアの文字が読み取れる。修道僧たちはこの奇跡を見て墓を掘ってみると、百合の根は亡くなった男の心臓から生え、茎は口から伸びているのだった。この挿話に続き、イエスを身籠ったマリアの「愛らしい顔は気高い光と大いなる清らかさに輝いていた」ことなど、告知後のマリアにまつわる出来事と賛美とが報告される。

参考：伝説 50 章 //

26-② (13180)-b/a カエサリアの聖女テオドシア (4月2日)



(13180)-b



(13180)-a

b 面末尾に表題 Von sant Theodosia 「聖テオドシア伝」。a 面冒頭に装飾大文字 S[Antt Theodosia ist geboren vô der stat Cesarie …] 「聖テオドシアはカエサリアの町の高貴な家に生れた。この町のどの娘よりも美しかったが、彼女が神に捧げた生涯はもっと美しかった」。307 年から翌年にかけてパレスティナで吹き荒れた大規模なキリスト教徒迫害はカエサリアにも及び、多くのキリスト教徒が捕えられた。テオドシアは信者たちのもとを密かに訪れ、自分のために神に祈って欲しいと願ったところ、間もなく神の声がして、あらゆる責め苦と敵とに耐えられるよう、聖霊によりあなたの心を強くしよう、と励まされる。だがテオドシアは捕えられ、裁判官ウルバヌス richtter Vrbanus による審判が行われる。テオドシアが彼と部下たちの信仰を難じたことからウルバヌスは怒り、彼女の髪をもって吊し上げて拷問を加え、衣服を剥ぐと、「美しい白雲が彼女を包んだので、裁判官は驚き、一層彼女を…」と、ここで本零葉は途切れる。308 年、18 歳で殉教。

挿絵はテオドシアが頭髮で吊し上げられ、拷問を受ける場面。

参考：LCI VIII 453f./LNH 782/LThK X 47//

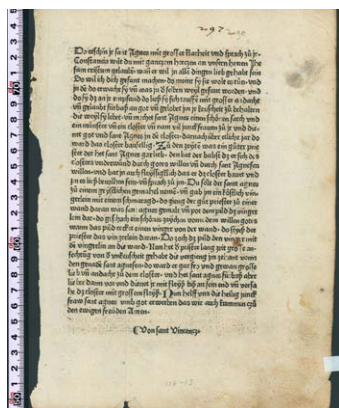
27-① (13181)-b ローマの聖女アグネス (1月21日、28日)

ローマの貴族の出身。ディオクレティアヌス帝の時代、258 年あるいは翌年に、若いキリスト教徒として、斬首、火刑あるいは剣で刺し貫かれて殉教。四世紀のイタリアで既に尊崇の対象になり、コンスタンティヌス大帝の娘コンスタンティアにより、墓の上に教会が建てられた。本零葉で語られる奇蹟譚によると、コンスタンティア Constancia が祈っていると、アグネス sant Agnes がはつきりと姿を現し、心からキリストを信じるなら、あなたを健康な身体にしてあげましようと言う。コンスタンティアが目覚めると、もう元気になっていた。彼女は洗礼を受けて生涯純血を守ることを誓い、聖アグネスのために大聖堂と修道院を建てた。何年も経ち、修道院は崩壊する。その頃聖アグネスを崇める僧がおり、教皇は彼に修道院を委ねて言った、あなたは聖アグネスをあなたの靈的な妻として娶りなさいと。そして彼にエメラルドの指輪を与えた。そこで僧はアグネス像が描かれた壁際に行つ

て指輪を差し出すと、不思議なことにアグネスの指が壁面から伸びて出たので、指輪をはめてやると、指は壁の絵の中に戻るのだった。しかも僧が長く抱いていた淫らな気持ちたちまち消え去ったのでとても喜び、アグネスを敬う気持ちも更に強くなった。その後彼は亡くなるまで修道院の世話をした。

参考：伝説 24 章 /LCI V 58ff./LNH 118//vgl.:LCI VII 337(Konstantina) /LNH 199 (Constantia) //

27-② (13181)-b/a サラゴサの聖ウィンケンティウス (1月22日)



(13181)-b



(13181)-a

スペイン北部ウエスカの貴族の出で、近郊の都市サラゴサの司教ウアレリウスの助祭。ディオクレティアヌス帝治下のキリスト教徒迫害に遭い、司教と共にヴァレンシアで永く投獄された後、304年頃殉教。

b 面末尾に表題 Von sant Vincenz 「聖ウィンケンティウス伝」。a 面冒頭に装飾大文字 D[Er lieb herr sant Vincêcius was ein cristen vñ ...] 「聖ウィンケンティウスはキリスト教徒で、神を愛し、大変熱心に神に仕え、アウクスブルク Augspurg の町で人々にキリストの教えを真剣に説き、司教 bischof ウアレリウス Valerius の下で助祭を務めていた。司教が彼に、説教を通じて人々に永遠の至福への道を示すようにと依頼する程、ウィンケンティウスは優れた説教師だった。その頃ディオクレティ

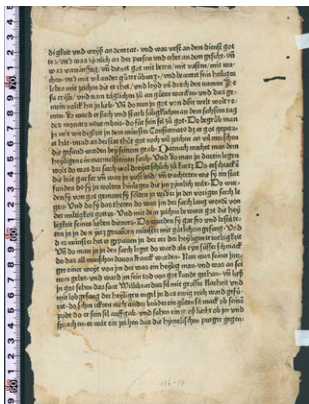
アヌス Dyoclecianus 帝によるキリスト教徒弾圧の時代、帝はウィンケンティウスが多くの人を改宗させたことを理由に二人を拘束、投獄し、飲食を禁じた。幾日も経って二人を引き出してみると、やつれているどころか血色が良く、元気である。実は二人が捕われている獄舎に「主がご自身で unser herre selber お出でになり、二人に食事をさせて下さったからであった」。ここで本零葉は途切れる。

ウィンケンティウス崇敬は五世紀頃に始まり、フランスからスイス、南ドイツでも多くの人々の崇拜の対象になった。本零葉でウィンケンティウスがスペインではなく、本書の印刷工房所在都市の聖人とされたのは、これと関係があるかもしれない。

挿絵は鉄の^{すのこ}簀に縛り付けられ、火あぶりの拷問に耐える聖人。

参考：伝説 25 章 /LCI VIII 568ff./LNH 833f./

28- ① (13182)-b/a ユトレヒトの聖ウィリブルドゥス (11月7日)



(13182)-b



(13182)-a

「…祈りと断食…によって神に仕え、…日々よい業を行ったので人々は彼を愛した。そして今神は彼をこの世から連れ去ろうとなさった。すると彼は病に罹り、安らかに亡くなった。11月6日のことであった」と、零葉は「彼」の事績を語る。一彼の亡骸は自らが創建したコンステルナト大聖堂 *münster Consternato* に埋葬され、数々の奇跡をもたら

す。彼の墓前で祈ると、どんな病も癒えたのである。そこで人々は改めて彼のために大理石で棺を作り、遺体を納めようとする、三フィートも短い。人々が驚き、思案に暮れていると、神の声が聞えた。それに従って再度試みると棺は遺体に相応しい長さになっており、こうした現象を通して神は「彼」の神聖さを人々にお示しになったのだった。また葬儀の際には彼によって叙階された弟子に、彼の霊が天使たちの歌に送られて天に昇るのが見え、集まった修道僧たちの間には芳ばしい香が漂ったという。

「彼」、即ちここで紹介される事績の主が、零葉に唯一名が挙げられる聖ウィリブロルドゥス *sant Willibrardus* と思われる。聖ウィリブロルドゥスは 658 年にイングランドのノーサンプロアで、アングロサクソン人を父として生れ、幼くして同じイングランドのリボンの修道院に預けられて、ローマ精神に基く教育を受ける。678 年、アイルランドに渡って著名な大修道院長エグベルトに師事し、688 年に司祭に。690 年には大陸に渡り、以後はフリース人に伝道。教皇セルギウス一世によりフリース人の大司教に任命、ユトレヒトに大聖堂を建立。739 年 11 月 7 日に死去。零葉の伝承と一日異なる。

参考：LCI VIII 616ff./LNH 857f./LThK X 1166//

28-② (13182)-a エウカイタ（またはアマセイア）の聖テオドロス

(11 月 9 日)

伝えられるところでは、テオドロスはオリエントに生れ、マクシミアヌス帝配下の兵として小アジア、黒海沿いのポントゥス地方（現トルコ）に駐留中、303 年のキリスト教徒の大迫害に遭った際に、同地方の都市アマセイアにある神々の母キュベレの神殿に放火したために、近郊の町エウカイタで拷問を受け、生きたまま焼かれたという。

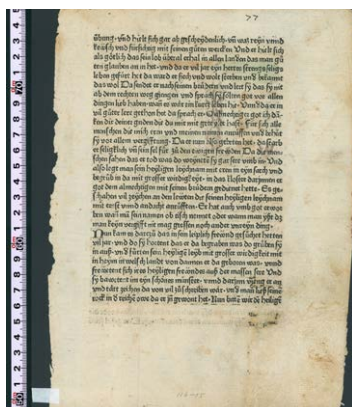
本零葉によると、テオドロスが敬虔なキリスト教徒であることが皇帝の耳に入り、他の信者たちと共に捕えられる。皇帝は司祭プリンコン *Princkon* (*pabst* は *probst* 大聖堂主任司祭の誤りか) に命じ、キリスト教徒たちがローマの神々に生贄を捧げるように仕向けさせる。司祭はテオドロスに二日の猶予を与え、皇帝の命に従うか否かを考えさせる。

するとテオドロスはキュベレ神 abgot Thibel の神殿に行き、神像を倒して燃してしまふ。捕えられ、裁判官の尋問に「万物の創造主であるイエスを信じなさい」と応じたために鞭で打たれ、牢に鎖で繋がれて一切の飲食を絶たれたと伝えて、零葉は途切れる。

挿絵はテオドロスが刑吏によって肉を裂かれ、火炙りにされる場面。また挿絵上に表題 von sant Theodorus 「聖テオドロス伝」。続いて裝飾大文字 S[Ant Theodorus was …] 「聖テオドロスはキリスト教徒で、神を愛し、日夜祈りと断食と…によって神に仕え…」と他の聖人にも共通の導入となっている。

参考：伝説 159 章 /LCI VIII 447ff./LNH 780f./LThK X 39f.//

29-① (13183)-b/a 司教聖プリニウス (祝日不明)



(13183)-b



(13183)-a

「…そして世間から完全に離れて清らかに…過し、善行を慎重に行った」と、人々の尊崇を集めた聖人の生前の事績を述べ、死の床に就いてからは同僚の修道士たちに、何よりも神を愛するようにと諭した。そして神に向かつては、人々を毒物から護るよう祈り、亡くなった後には、人々が食卓で彼の名を呼ぶことにより霊験が示されたのであった。ところで聖人を血縁者が長年捜していた。ここに埋葬されていると知ると亡骸を掘り起こし、異国にある聖人の出身の地へ運び、彼のため

に聖堂を建てた。するとそこでも聖人は数々の験^{しる}しを現したという。
本零葉はこうした事績を伝え、末尾部で初めて彼の名を挙げてこう付け加える、Nun bittē wir dē heiligē bischoff sant Priminium…「私たちは司教聖プリミニウスが神にとりなしていただきますようお願いします。そして私たちが彼の元を決して離れることがありませんように、アーメン」。

参考：

29-② (13183)-a ローマの聖クリュサントス (10月25日)

2行目末尾に表題 Vō sant Crisanto 「聖クリュサントス伝」。次行に装飾大文字 C[risantus was ein gûter cristen vñ het got lieb …]「クリュサントスは善良なキリスト教徒で、神を愛し、熱心に神に仕えた」と、このエジプト出身の聖人についても導入部は他の聖人伝と変わらない。続いて、有力な騎士である父ポリヌス Polinus によって画策された、息子に棄教を迫る奇策が紹介される。父は監禁した息子のもとに5人の女を送り込む。彼女たちが息子を誑かせば、息子はキリストの教えを捨てるであろうと考えて。だが神はクリュサントスの祈りをお聞きになり、女たちを飲食さえすることなく眠らせてしまったために、父の企ては失敗に終わる。次に父は身なりも振舞いも上品で、美しいターリア Taria を息子のもとに行かせる。するとクリュサントスは彼女にキリストの教えを説き聞かせ、ターリアの「お父様のお考えを理解してくださるように」との言葉にも応じる。即ち、彼は神の叡智に従い、共に生涯純潔を守ることをターリアに約束させた上で結婚を決意する。零葉はここで終わるが、後に二人はローマ皇帝ディオクレティアヌス(在位 284-305) 治下のキリスト教徒迫害に遭い、殉教する。二人の遺骸はローマのヴィア・サラリア・ヌオヴァ街道沿い、トラソ Thraso の墓地に――説によると、生きたまま――埋葬されたが、538年頃ゴート族により破壊され、ハドリアヌス一世(在位 772-795)によって再建された。トゥールのグレゴリウス(538-594)によると、多くの巡礼がこの墓を訪れたといわれ、遺骨は844年にはプリュームのベネディクト大修道院(アイフェル山地)へ、そこから更にボン南西のミュンスターアイフェ

ルにもたらされて、ドイツ各地で多くの信奉者を得た。

挿絵は聖人たちの受難の場面か。通常は、二人は生きたまま埋葬されたと伝えられるところから、斧と松明を持って泥濘に満ちた墓穴にいる場面、あるいは三角旗の付いた槍と棕櫚とを手にした騎士として描かれる。

参考：伝説 150 章 /LCI V510f./LNH 192//

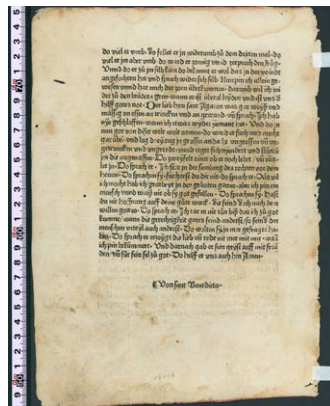
30- ① (13184)-a 聖人不明

零葉の冒頭、聖人伝末尾の一行「神が私たちに力をお授けくださいますように、アーメン」。

30- ② (13184)-a/b 大修道院長 聖アガトン (祝日不明)



(13184)-a



(13184)-b

a 面 2 行目に表題 Von sant Agaton 「聖アガトン伝」。次行に装飾大文字 D[Er lieb herre sant Agaton was ein cristen …] 「聖アガトンはキリスト教徒で、神を愛し…」と、型どおりに聖人を紹介。アガトンは同僚に推されて大修道院長に選ばれると、3 年間口に石を含んで過ごし、沈黙することを学んだ。あるとき彼は、一番大切な仕事にはどんな徳があるかと問われると、神に祈ることほど大切な仕事はないと私は思っています。悪霊がいつも私の祈りの邪魔をしますから。もし他のこと

をしている時であれば、少し休んでから続けることもできますけども、祈ることは大きな闘いなのです、と答えた。

本零葉はヴォラギネの『黄金伝説』をなぞるように、聖アガトンの事績の数々を紹介し、また「彼を神がこの世から連れ去ろうとなさった時、彼は病になり…3日の間飲み食いもせず、身動きもせず、物思いに耽ったまま床に臥せ…」、神の裁きを待ってから、魂は神のもとへと旅立った、と伝える。「彼（聖アガトン）が私たちに力をお授けくださいますように、アーメン」と締め括る。尚、聖アガトンについては実在の可否を含めて不明。また挿絵に描かれる事績も不明。

参考：伝説 173 章 //

30- ③ (13184)-b 聖女ベネディクタ（祝日不明）

b 面末尾に表題 Von sant Benedicta 「聖女ベネディクタ伝」。同名の聖女は「オリニイ＝シェル＝オアーズの聖女」(24 参照)の他に、362 年にローマ皇帝ユリアヌス（在位 361-63、^{アスボターク}背教者と呼ばれた）治下で他の乙女たちとともに殉教したフランスの「ソワソンの聖女」、あるいは司祭クリスプスおよび聖職者クリスピニアンと共にコンスタンティヌス大帝の皇女コンスタンティアの宮廷に高官聖ヨハネスと聖パウルスの兄弟を訪問した際に同様に背教者ユリアヌスのもとで捕えられ、斬首されたとされる「ローマの聖女」などが知られる。

参考：LCI V365、VI 7/LNH 161f.//vgl.: 伝説 82 章 /LCI VII 193ff./LNH 442f.//

31- ① (13185)-b/a 大修道院長 聖ヨハネス・コロボス (11月9日)



(13185)-b



(13185)-a

上部エジプトで4世紀に生れ、18歳の時に低地エジプトの砂漠にある東方教会のコロニーに移る。後にここに修道院を創建。398年あるいは409年に亡くなったとされる。なお祝日は、コプト教会では10月17日および8月21日。

b面1行目に装飾大文字 J[ohannes der abbt...]「大修道院長ヨハネスはキリスト教徒で、昼夜祈りと断食と…により神に仕えた…」。神により近づこうと修道僧になり、彼の振舞いと叡智とを讃えて人々は彼を大修道院長にしたので、ヨハネスは熱心に職務に励んだ後、隠修士として40年森で過した。ある時、人生がどれだけよくなったかと問われ、隠修士になってからは、太陽は私が殺生によるものを食べるのを見たことはないし、また私は腹を立てたこともないと答えたという。聖人のこのような事績を補強するように、著者はヴォラギネのまに、サラミスの司教エビパニオス bischoff Epiphanio (315? - 403) が大修道院長ヒュラリオス abbt Hylario (291-371) を肉料理でもてなそうとして、修道僧になって以来殺生により得たものを食べたことはないと拒まれた逸話を挟むことも忘れない。ある時ヨハネスは、自分も天使に倣って、仕事をせずにひたすら神に仕えたいと思い、飲食せず、裸で一週間を森で過したが、蠅に刺され、餓死寸前で修道僧の小屋に戻つ

たところ、人間として生きるために食事をしたいのなら、働かなければならないのです、とたしなめられたという。臨終に際して彼は、「私は我意を押し通そうとしたことはないし、また自分が前もってしたことがないことを他人に教えたこともなかった」と語って亡くなり、「その魂は永遠の喜びへと旅立った。大修道院長ヨハネス様が私たちに力をお授けくださいますように、アーメン」。

挿絵は右手に聖書、左手に司教杖を持つヨハネス。通例は、一方の手に十字架を持ち、他方の手で祝福のしぐさをする、ひげを生やした修道僧として描かれる。

参考：伝説 170 章 /LCI VII 144//

31- ② (13185)-a エチオピアの聖モーセス (8 月 28 日) [33- ①に続く]

320 年頃にエチオピア人として生まれ、官吏の奴隷になるが、略奪欲が強く、また罪を犯したために追放された。盗賊団の首領だったこともあって盗賊モーセスと呼ばれたこともあるが突然回心し、低地エジプトのナトロンの谷にある東方教会のコロニーで修道僧になり、後にアレクサンドリアで司教に叙階される。395 年頃にベルベル人の襲来にあって殺される。尚、祝日はコプト教会では 7 月 1 日。

頁中ごろに表題 Von sant Moyses 「聖モーセス伝」。続いて装飾大文字 M[Oyses was ein Christen vnd het got lieb/...] 「モーセスはキリスト教徒で神を愛し、修道僧となって熱心に祈りと断食と…によって神に仕えた」。ある時修道僧が彼に、何かよいことを教えてくれるように頼むと、モーセスが応えるには、「あなたの庵に座っておいでなさい。庵室が何もかも教えてくれます」と。

挿絵はこれに続く事績 (→ 33- ①) による。

参考：伝説 171 章 /LCI VIII 24/LNH 598//

32- ① (13186)-a カタニアの聖女アガタ (2 月 5 日)

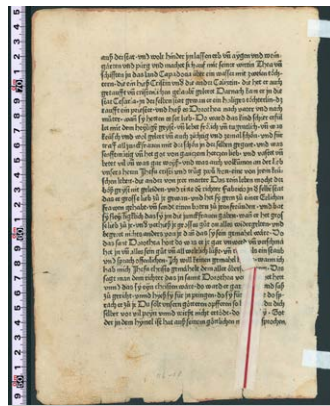
ローマ皇帝デキウス (在位 249-51) 治下のキリスト教徒迫害により、シチリア島カタニアで殉教。遺骨は当地の司教座聖堂に安置される。伝えられるところでは、アガタはカタニアの高貴な家のおでキリスト

教を信奉していたために、総督クィンティアヌスの求婚を拒む。総督は棄教させようとアガタを娼家に送り込むが目的を果たせず、その後の、乳房を切り取る等の拷問により彼女は殉教したとされる。本零葉は聖アガタ伝の最後。総督が川に転落して死体があがらなかったが、これは聖アガタ *sant Agatha* への拷問の当然の報いであるとする。その一年後、アガタの誕生日を祝い、墓地に布を広げた。ところがその日に山（エトナ）が噴火し火が町に迫ったので、町の異教徒たちは墓地に逃げ込み、アガタの墓の布を火に向けると、溶岩はたちまち向きを変えたので、彼らは聖女を讃えたと、事績を締めくくる。
参考：伝説 39 章 /LCI V44ff./LNH 116/Schedel CXX 表 //

32-② (13186)-a/b カエサリアの聖女ドロテア（2月6日）



(13186)-a



(13186)-b

a 面中ほどに表題 *Von der heyligen junckfrawen sant Dorothea* 「神聖なる処女 聖ドロテア伝」。次行冒頭に装飾大文字 *D*[*Orothea die heylig junckfrawe ist geboren...*] 「聖処女ドロテアはローマの高貴な家に生れた...」。ディオクレティアヌス帝（在位 284-305）治世下でキリスト教迫害が始まると、父テオドルス（零葉では *Thor*us）と母テオドラ（*Thea*）は二人の娘を伴って海路カッパドキア *Capadocia* へ向かい、カエサリア *Cesaria* の町に住む。ドロテアはそこで生れ、両親に可愛がられ、し

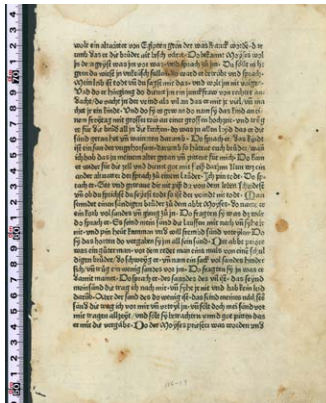
かも聖霊に満たされて育つ。さて、この町の裁判官ファブリキウス de richter Fabricio はドロテアを妻に迎えようと使者を送って求婚するが拒まれ、彼女がキリスト教徒であることを知ると、ローマの神々に生贄を捧げるよう強要する。本零葉はここで終わるが、ファブリキウスはこれも拒まれると、ドロテアを投獄し、拷問の上斬首する。305 年頃のこととされる。

挿絵はドロテアの拷問。

参考：LCI VI 89ff./LNH 221/Schedel CXXV 裏//

33- ① (13187)-b/a エチオピアの聖モーセス

[31- ②の続き]



(13187)-b



(13187)-a

前頁 (⇒ 31- ②) の挿絵に取り上げられた物語が先ず語られる。病に侵されたある老修道僧 *altuatter* が同僚に迷惑をかけることを嫌い一貞潔の誓いを破ることになろうからとモーセスが諫めたにも拘らずエジプトへ去る。修道僧はそこで健康を回復するが、何かと世話をしてくれた敬虔な乙女 *ein junckfraw von rechter andacht* との間に子供を設けた話。そして別の老修道僧が、自分の身体は老いて死んだも同然だ *Ich pin todt* と嘆いた言葉を同僚がたしなめ、生命に決別するまではそんなことを言うものではない、自分が死んだと言ったところで敵 *veind* (死者の魂を奪う悪魔) が死んだわけじゃあないのだからと語ったと、挿

話が続く。そんなある時、大修道院長モーセス abbt Moysesのもとに、罪を犯した修道僧が送られて来た。するとモーセスは砂を満たした籠を背負って彼の前に現れる。居合わせた修道僧たちは砂の意味を悟り、件の修道僧の罪を許した逸話も加えられる。そして最後の事績－司祭に叙階され、白いミサ服を纏ったモーセスを見て、「純白になられましたな」と語り掛ける司教に、「外側だけです nur aussen」と彼が応えると、司教が「神が内側もそのようにして下さいとよいですね Wolt got das es jnnen wäre」とやりかえたことなどが続く。

33- ② (13187)-a エジプトの大修道院長 聖アルセニウス (7月19日)

挿絵上に表題 Von sant Arsenio 「聖アルセニウス伝」。続いて装飾大文字 A[Rsenius waz eyne cristê vñ was jn des küniges palest/ vnd …] 「アルセニウスはキリスト教徒で、王宮に仕えていた / そして敬虔な気持ちで神に願った、私にとってこの上なく賞賛に値する生涯をお示してください、と。すると神の声がした。アルセニウスよ、人を避けなさい。そうすれば…」と、アルセニウスが修道生活に入る契機が語られて、本零葉は終わる。

アルセニウスは354年、ローマの元老院議員の家に生れる。教皇 Damas により助祭に任じられ、皇帝テオドシウス一世 (在位 379-395) により383年に皇子たちの教育係りとしてコンスタンティノープルに招かれた。395年頃にはこの地を去り、エジプトの幾つかの砂漠で、一先ずリビアで、バルバル族襲来後はスキアティスで、更にメンフィス近郊のトロエで10年と、隠修士として厳しい修道生活を送り、90歳で亡くなったという。

挿絵は、信仰上の理由ではるばるローマから彼を訪ねてきた貴族の老夫人を追い返すアルセニウス。夫人は落胆の余り、帰途のアレクサンドリアで病に倒れるが、その地の司教テオピロス (在位 385-412) から、アルセニウスが彼女の魂を救うために祈っていると聞き、快復して帰国する。

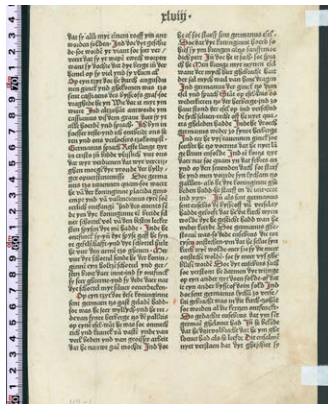
参考：伝説 172 章 /LCI V251f./LNH 148f./Schedel CXXX III表 //

V. 『Legenda aurea // 黄金伝説』

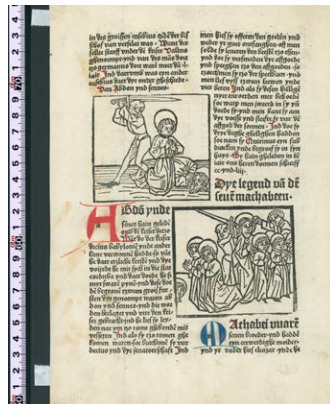
ルートヴィヒ・フォン・レンヒェン (ケルン) 1485 年

- *1. この時代のドイツ語による刊行物は、アウクスブルクやニュルンベルクなど、著名な印刷工房が集まる南ドイツでは高地ドイツ語の出版が、レンヒェン工房のあるライン河下流域のケルン地方や北部ドイツでは、現地人の日常語である低地ドイツ語による刊行物が一般的。本書は低地ドイツ語による忠実な翻訳。

34-① (13188)-b/a オセールの司教 聖ゲルマヌス (7月31日)



(13188)-b



(13188)-a

378 年頃、ガリアのオセール Auxerre (パリ南東) の高貴な一族に生れる。オータンで自由七学科を学んだ後ローマに移って法学を修め、西ローマ皇帝ホノリウスによりオセール地方の長官に任ぜられる。キリスト教に改宗し、司祭に叙品。418 年にオセールの司教に選ばれてからは妻を離縁し、修道僧と変らぬ厳しい生活を送り、私財を投じて多くの教会や修道院を創建した。また、二度にわたってイングランドに渡り、ペラギウス派の勢力抑制に尽力。また 448 年にはブルターニュ地方のアルモリカ人の反乱に対して寛大な措置を願うために、ラヴェンナに

ウァレンティニアス帝を訪問中に死去。

本零葉はレンヒェンによる 1485 年版の第 48 葉、b 面上欄外に XL VIII。b 面冒頭はサクソン軍とブリトン軍の戦闘。ゲルマヌスによって受洗したサクソン人たちが突撃してくるブリトン軍に向かって一斉に「アレルヤ」と勝ち鬨を挙げ、敵を潰走させた事績に始まり、ゲルマヌスが司教聖カシアヌスの墓参 sent cassiaens des bysscofs graf をした際の出来事、そしてラヴェンナ rauennen でウァレンティニアヌス valencianus と皇母プラキダ koninginne placida の歓迎を受けた際の奇跡とゲルマヌスの言行、その七日後の 430 年 in de iair cccc ind xxx にゲルマヌスが亡くなったこと、ウェルチェリ司教聖エウセビウス sent eusebius de bysscoff vā verselay の教会の献堂式でゲルマニウスの遺体が行った奇跡。このエウセビウスを、ウァレンス帝 keiser Valens（在位 364-78）治下の同じウェルチェリ司教、大エウセビウスと混同しないようにと念を押して、聖ゲルマヌス伝は終る。

参考：伝説 102 章 /LCI VI 399ff./LNH 316/Schedel CXL VIII 表 //

34-② (13188)-a 聖アブドンと聖セネス（7 月 30 日）

左欄挿絵上に表題 Von Abdon ynd sennes 「アブドンとセネス伝」。挿絵下に装飾大文字 A[Bdō ynde sēnes hain geledē onð dē keiser decio...] 「アブドンとセネスはデキウス帝のもとで殉教し…」。

ローマに征服されたバビロニア babyloniē の副王 grois fursten だったふたりは、この町で拷問により殺されたキリスト教徒 kerstē の亡骸を埋葬したとして、ローマに送られる。キリスト教を信奉する二人は棄教を迫られた後、二頭のライオンと四頭の熊 tzween leewen ynde vier beren をけしかけられ、遂には剣を投げられて殉教。放置された遺体は副助祭クウイリヌス Quirinus eyn subdiacken が引き取って埋葬、253 年 cc•ynd•liij のことであつたと伝える。史実によると、二人はディオクレティアヌス帝治下の迫害により、304 年頃死去。オリエントの奴隷、あるいは解放奴隷だったらしい。

参考：伝説 101 章 /LCI V 4f./LNH106/Schedel CXX 表 //

34- ③ (13188)-a マカバイの七兄弟 (8月1日)

右欄挿絵上に表題 Dye legend vā dē sevē machabeen 「マカバイの七兄弟伝」。挿絵下に装飾大文字 M[Achabei ware seven broeder ynd haddē eyn eerwerdighe moider…] 「マカバイに七人の兄弟がおり、尊ぶべき母があつて、父の名はエレアザル eleazar と言い…」。

カトリックでは正典に数えられる「マカバイ記」第二書第七章の物語。シリアのセレウコス朝の時代、パレスチナに押し寄せるギリシャ主義—これを体現するアンティオコス四世（在位 前 175-164）に抵抗するマカベア一族の七人兄弟の物語。

挿絵は母の見守る前で次々に拷問にかけられながらも、「父祖伝来の律法に背く」ことを拒んで斬首される兄弟。

参考：LCI III (1971) 144f., VIII 343f./LNH 535f.//

35- ① (13189)-a 使徒 聖バルナバ (6月11日)

十二使徒には数えられないが、シェーデル『ニュルンベルク年代記』によれば広義の、即ち 72 人の使徒のひとり。キプロス島のレヴィ人ヨセフは、使徒たちの間で「慰めの息子」の意味を込めてバルナバと呼ばれた。新約聖書「使徒言行録」によれば、所有する農地を売った代金を使徒たちに用立て、また回心したパウロを使徒たちのもとに連れて来たのもバルナバである。パウロの第一次宣教旅行に同行するが、後には彼と別れて従兄弟の「マルコと呼ばれるヨハネ」を伴ってキプロスで宣教活動をした。晩年については不明。伝承によれば、東キプロスのサラミナ（サラミス）で投石の刑により、あるいは投石刑の後に、生きたまま火刑に処せられ、殉教したという。

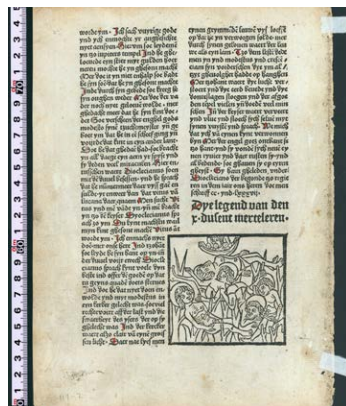
本零葉は『黄金伝説』によるバルナバ Barnabas 伝の末尾部。ベネディクト会士シグベルトゥス Syghebertus (1030?-1112) の著作に基き、皇帝ゼノン Zeno と教皇ゲラシウス Ghelasius の時代までバルナバの遺骨がサラミスにあったとする。また聖ドロテウス sente Dorotheus により、バルナバがミラノの初代司教 der …eyrste bysscoff van melanen だったとも伝える。

参考：伝説 76 章 /LCI V316ff./LNH 157/Schedel CV 表 //

35-② (13189)-a/b シチリアの聖ワイトゥス (6月15日)



(13189)-a



(13189)-b

ディオクレティアヌス帝（在位 284-305）による大迫害に遭遇し、12歳で殉教したワイトゥスの事績。実在したとされるワイトゥスの名が初めて言及されるのは5世紀に編纂された『ヒエロニムス殉教録』、6月15日の項であるという。600年頃になると、ローマの属州ルカーニア（現南イタリア、バジリカタ）で、奇跡を含む様々な出来事が付加されたワイトゥスの受難譚が形成され、これが後に北イタリア、フランス、ドイツに伝わって今に残る聖人伝になった。それによると、シチリアのヒュラスはあらゆる手段を講じて息子ワイトゥスにキリスト教を捨てさせようとするが果たせず、代官ウァレリアヌス *valerianus der vaigt* に息子の身を委ねる。だが代官が彼を打ち据えさせようすると、代官あるいは刑吏の手が萎えてしまう。少年が神に祈って治してやる始末である。父が息子連れ帰って部屋に監禁すると芳香が漏れ出てくる。覗き込むと七人の天使 *seven engelen* に囲まれた息子の姿が見え、途端に父は視力を失い、息子が神に執り成して父は事なきを得る。その後も父は息子に棄教を迫るが、ある日神の使い *der enghel gods* がワイトゥスの家庭教師モデストゥス *tzuchtmeyster modestus* に現れ、その指示に従って彼は少年を連れてルカーニアに逃れる。同じころディオクレティアヌス帝 *Dioclecianus* の子息が悪魔に憑りつかれるとワイトゥスは探

し出され、祈りによって皇子の病を癒す。この時もウィトゥスはモデ
ストゥスおよび乳母のクレスケンティア *crescêciam* と共に棄教を迫ら
れる。終には三人は天の使いによって拷問台から救い出され、魂を神
に委ねる。「我らの主の 287 年に *in dem iair ons heren…cc•ynd•lxxxvij*
に施政を始めたディオクレティアヌスのもとで」。

a 面挿絵上に表題 *Dye legend van sent vitus ynd modestus* 「聖ウィ
トゥスと聖モデストゥス伝」。挿絵下に装飾大文字 *V* [*Itus was eyn seer*
drefflich ynd gheloeuich kynd van xij …] 「ウィストゥスはとても高貴
な家の出で、信心深い 12 歳の子供だった…」。

挿絵は、ウィストゥスが受けた釜茹での場面。彼が受けた拷問の中
でも最も多く描かれ、モデストゥスおよびクレスケンティアを伴うこ
ともある。

参考：伝説 77 章 /LCI VIII 579ff./LNH 836ff./

35- ③ (13189)-b 聖アカツィウスとアルメニアの一万人の殉教者

(6 月 22 日) ⇒ 3- ② /17- ② /36- ② /

挿絵上に表題 *Dye legend van den x • dusent merteleren* 「一万人の殉教
者伝」。なお、17- ②を参照のこと。

ドイツ語版 5

(22004-13198-a/b)

VI. 『Legenda aurea// 黄金伝説』

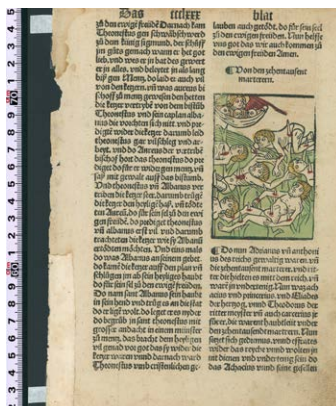
ヨハン・シェーンスペルガー (?) (アウクスブルク) 刊行年不明

36- ① (13198)-a マインツの聖アルバヌス (6 月 21 日) ⇒ 3- ① /17- ① /

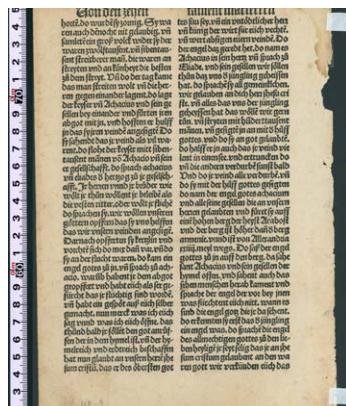
上部欄外に *Das ccclxxx blat* 「第 380 葉」。なお、17- ①を参照のこと。

36- ② (13198)-a/b 聖アカツィウスとアルメニアの一万人の殉教者

(6月22日) ⇒ 3- ② / 17- ② / 35- ③ /



(13198)-a



(13198)-b

a 面挿絵上に表題 Von den zehentauesent marterern 「一万人の殉教者伝」。
挿絵下に始まり b 面に続く翻訳文は 3- ②、17- ②とほぼ同じである。b
面上部欄外にも表題。なお、17- ②を参照。

ドイツ語版 6 (22004-07687-a/b ~ 07689-a/b)

VII. 『Heiligenleben // 聖人伝』

印刷工房および所在地、刊行年不明

- *1. 低地ドイツ語訳であるところから、印刷工房の所在地はケルンを含
むドイツ北部、あるいはオランダか。ヴォラギネ『黄金伝説』の
かなり忠実な翻訳を含む
2. 各葉とも二段組み 47 行。印刷面 225mm × 145.5mm、
挿絵 75mm × 150mm (左側面に 8mm 幅のボーダーを含む)
3. 各葉上部欄外、左ページに Van Sunte、右ページに聖人名を続けて
「聖…伝」とし、更に Dat … Blad 「第…葉」と記す

37-① (07687)-a 聖クリスピヌスと聖クリスピニアヌス (10月25日)

⇒ 8-② /

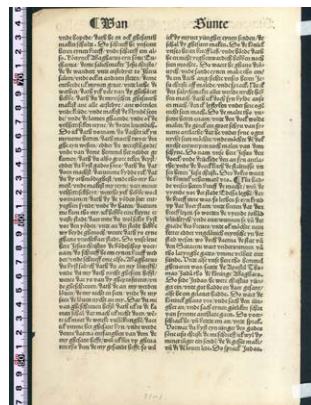
高貴な家の出の、兄弟とも伝えられる聖人たちの伝記の末尾。Do wart he gans tornich vmmen/vñ hoet van torne/…「それを聞くや彼は怒り、聖人たちの首を刎ねるよう命じ…」と、クリスピヌス Crispinū とクリスピニアヌス Crispinianū の殉教する場面。西暦 304 年頃のことと言う。彼 he とは、ディオクレティアヌス帝によりガリアに派遣された裁判官。通例リクティオナリウス、あるいは類似した名でガリアでの多くの殉教伝に登場する。なお、8-②を参照のこと。

37-② (07687)-a/b 使徒 聖シモンと聖ユダ (10月28日)

⇒ 8-③ /



(07687)-a



(07687)-b

挿絵上に表題 Vā sūte Simone vñ Juda dē aposto 「使徒聖シモンと聖ユダ伝」。挿絵下左段に装飾大文字 S[ymon chananeus vnde Judas/de okthadeus ghenemmet wert/…]「熱心党のシモンとタダイとも呼ばれるユダは共に聖小ヤコブの兄弟 broedere des …sunte Jacobs de、母はクレオバのマリア maria cleophe、父はアルパヨ Alpheus であった。そしてユダは我らが主のご昇天の後には、聖トマスによってアブガロス王 Koenynck Abagharus のもとに派遣されたあの使徒である…」と記し、エウセビオス『教会史 hystorie Ecclesiastica』を典拠に、ユダがエディ

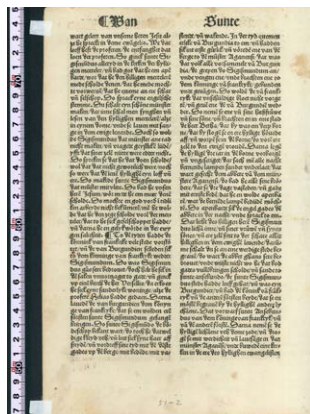
サのアブガロス王を訪れた経緯を語って、本零葉は終る。

因みにシモンの名に被せられた「熱心党 chananeus」は、イスラエルの神へのユダヤ人の熱狂的信仰集団を現す語と言われるが、かつてはイエスが婚礼の席で初めての奇跡を行ったカナの地名に結び付けられ、シモンがその際の花婿と目されたこともある。なお、8-③を参照のこと。vgl.: 教会史 1-66ff.//

38 (07688)-a/b ブルグント王 聖シギスムント (5月1日)



(07688)-a



(07688)-b

シギスムントは異端アリウス派の信奉者であった。だが496年、ヴィエンヌ（南フランスの都市）の大司教アウイトゥスによりカトリックに改宗し、東ゴート王テオデリクスの娘を娶るが、彼女は早くに亡くなってしまふ。516年、父グンドバルトの死に伴ってブルグントの王位を継ぐと、後妻の讒言に惑わされて、先妻との間に儲けた息子を扼殺させてしまふ。息子がブルグントの王位を奪って祖父の東ゴート王国との併合を企んでいると疑ったのである。シギスムントはこれを悔い、彼の手で修復、あるいは創建したアガウネンセ（スイス、ヴァリス州のサン・モリス）の修道院 *mūster Aganensi* で贖罪の日々を送り、また常設の聖歌隊を設けている。翌年フランク人との間に戦闘が勃発すると、頼りにしていた先妻の父テオデリクスの支援が得られずに敗退、

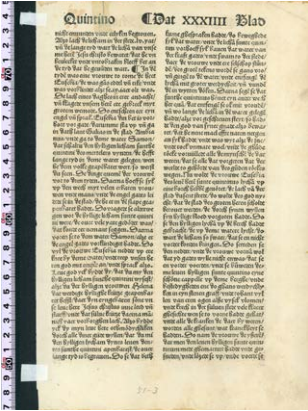
再度修道院に逃れるが、捕えられてオルレアンに送られ、524年に妻子とともに溺死刑に処せられたという。

本零葉ではシギスメントの祖父グンデウィクス Gundewicus に遡って、その息子たちグンドバルト（零葉ではグンデブンドウス Gundebundus）とゴデギセルス Godegiselus 兄弟の熾烈な後継争いに言及するなど、トゥールのグレゴリウス『フランク史』、あるいはこれに類する歴史書に依拠したと思われる記述が続く。

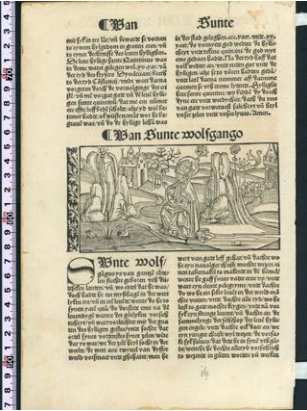
挿絵について、聖シギスメントの事績との関連は不明である。通例では王冠を頭に、王笏、十字架付の球、剣あるいは棕櫚を手に、泉を傍らにして描かれる。

参考：LCI VIII 349ff./LNH 746//vgl.: フランク史 2 巻 28ff.、3 巻 5f.//

39- ① (07689)-b/a アミアンの聖クウィンティヌス（10月31日）



(07689)-b



(07689)-a

伝承では、ローマの元老院議員ゼノの息子だという。245年頃ガリアに渡り、アミアンとその周辺で宣教を行った。それを知ったローマ皇帝マクシミアヌスの命により、ガリアの長官リクティオウアルスによって捕えられ、さまざまの拷問を受けた後にアウグスタ・ウェロマンドルムに移されて斬首され、亡骸はここを流れるソム川に投棄されたという。この町は後に彼の名に因んで、サン・カンタン St-Quentin と

呼ばれている。

本零葉はその後日譚。…de lange tyd wart de lichā van vnseme herē Jesu christo bewaret …「亡骸は長いこと我らの主イエス・キリストによって守られ…」ていたが、ある時エウセビア Eusebia（またはエウゲニア Eugenia）という高貴なローマの婦人に天使が現れ、アミアンの町 de stad Ambianus に行くように告げる。「そしてサモン（ソナム）川に行きなさい。そこに殉教者聖クウィンティヌスの亡骸が見つかるだろう… unde ga to deme water Samon/dar schaltu den hylligen licham sunthe quintini des mertelers vynden/…」と。エウセビアが天使に導かれてソナムの川岸に跪き、「聖クウィンティヌス様のご遺体がどこにあるか、お教え下さい、コンスタンティヌス大帝の母ヘレナ様 Helena に聖十字架 hyllighe krūtze の在り処をお示しになられたように」と祈ると、聖人の亡骸が浮き上り、神の力によって川を町まで運ばれるのだった。エウセビアは後を追って亡骸を掬い上げ、山上にチャペルを建ててクウィンティヌスを祀った。殉教から 55 年、ディオクレティアヌス帝 Dyoclecianus とコンスタンティヌス帝 Cōstancius との間の時代であった。

参考：伝説 153 章 /LCI VIII 239f./LNH 691//vgl.:Schedel CXX VI表 //

39-② (07689)-a レーゲンスブルクの司教 聖ウォルフガング（10月31日）

挿絵上に表題 Van Sunte wolfgango 「聖ウォルフガング伝」。挿絵下左段に装飾大文字 S[Vnte wolf/gāgus ys van gantzē eddelen slechte geboren…] 「聖ウォルフガングは…とても高貴な家に生れ…」。

史実によると、924 年頃、ドイツのロイトリンゲン近郊のプフリンゲンに、自由ではあるがあまり豊かではない家に生れ、ボーデン湖畔ライヒェナウの修道院付属の学校で学んだ後、学友ハインリヒと共にヴェルツブルクに移る。国王の親族を伯父に持つハインリヒがトリニアの大司教に就任すると、ウォルフガングはこの町の司教座聖堂付属学校の教師から大司教の秘書局長に。さらにスイスのアインジーデルンのベネディクト修道院に入り、972 年にレーゲンスブルクの司教に叙階され、司教区内の修道院改革を行う。994 年に死去。

ウォルフガング崇拝は彼の死後早くから盛んで、彼にまつわる幾つかの地が巡礼たちの聖地とされた。なかでも中部オーストリアのザルツカマーグート地方のアーバー・ゼーは、聖人が近郊のファルケンシュタインの荒野で隠者として過ごしたと伝えられるところから、彼に因んで聖ウォルフガング湖と呼まれ、彼に対する崇拝はここからドイツ全域、ハンガリーにまで広がった。

挿絵は、渴えた同行者のために聖人が岩から湧き出させたウォルフガング湖、その湖畔に司教杖を手にした聖人。岩には森を切り拓くために聖人が用いた斧も見られる。また、聖人の右手には彼がここに創建した、塔がひとつの小さな教会。そして図の右奥から来る巡礼たちは、聖人の背後に屹立する、中を削り貫いた岩を潜り抜けることにより、あらゆる病を「こそげ落し」てから、聖地にたどり着く。

参考：LCI VIII 626ff./LNH 862f.//vgl.:Schedel CLXXX II 表//

ドイツ語版 7

(22004-07690)

VIII. 『Heiligenleben// 聖人伝』

印刷工房および所在地、刊行年不明

- ★1. 高地ドイツ語訳。シュトラースブルクのヨーハン・グリューニンガー/JohannGrüninger (活躍時期：1482-1531) の工房作か

40 (07690-a/b) エジプトの聖マカリウス (1月15日)



(07690)-a



(07690)-b

b 面中央に切り貼りにより、Hie kam der teuffel für Macharius zellē vñ wolt die brüð visitierē. 「するとマカリウスの庵室の前に悪魔がやって来

て、僧たちのもとを訪れようとした」。悪魔は森で修業する隠修士たちの誘惑を試み、一度は成功する。それを知ったマカリウスは当の隠修士を戒めて回心させ、悪魔によるその後の誘惑を免れることができたという。

マカリウスは 300 年頃に上部エジプトで生まれ、カイロの北西部、ナトロンの谷の砂漠で修道僧になる。その後ヴァレンス帝治下、異端アリウス追放の嵐が荒れ狂うなかで、同派の司教によってナイル河の小島に島流しにされたという。390 年頃死去。大マカリウスとも呼ばれる。

Vgl.: 伝説 18 章 /LCI VII 474ff./LNH 535//

参考文献

- | [略語] | [参考文献] |
|---------|---|
| 伝説 | ヤコブス・デ・ウォラギネ / 前田敬作 他訳『黄金伝説』
全 4 巻 人文書院 /1979-1987
Die Legenda aurea des Jacobus de Voragine
Aus dem Lateinischen übersetzt von Richard Benz
Gerlingen(Lambert Schneider im Bleicher Vlg.)/1997 |
| LCI | Begründet von E. Kirschbaum:Lexikon der christlichen
Ikonographie Bd. 5-8 Freiburg i. Br. (Herder)/1973-1976 |
| LNH | O. Wimmer/H. Melzer:Lexikon der Namen und Heiligen
Innsbruck, Wien(Tyrolla-Verlag)/1988 |
| LThK | Lexikon für Theologie und Kirche in 10 Bänden
Freiburg i. Br.(Herder) /1957-1965(2.Aufl.) |
| Schedel | Hartmann Schedel:Weltchronik 1493
Köln, N.Y. , London, Tokio(Taschen)/2001(Nachdruck) |
| 教会史 | エウセビオス / 秦剛平 訳『教会史』全 3 巻
山本書店 /1986 |
| フランク史 | トゥールのグレゴリウス / 杉本正俊 訳『フランク史』
新評論 /2007
―― / 兼岩正夫・臺幸雄 訳注『歴史十巻』全 2 巻
東海大学出版会 /1975-1977 |

追記

本コレクションでは各葉にナンバーが付されていることは、本誌 15 号「聖書」、18 号「聖人伝」(1) でも述べた。これについてハイフンの位置の誤りが指摘された。正しくは本コレクションの番号 22004-、その後に零葉毎の、0 または 1 で始まる 5 桁のナンバーが付される。本稿ではこれに従って File No. を表記した。上記 2 点の拙稿についても、今後機会を得て同様の訂正をする予定である。